

史 跡 福 山 城 III

昭和60年度 発掘調査概要報告

1986. 3

北海道松前町教育委員会

史跡 福山城 III

昭和60年度 発掘調査概要報告

1986. 3

北海道松前町教育委員会

序

国指定史跡福山城は、昭和50年度に史跡福山城保存管理計画が策定され、環境整備事業に係る発掘調査は、昭和58年度以来3ヶ年を経過することになりました。この間、これまで不明確であった内堀の姿が明らかになり、内堀の修復工事に向けての基礎資料を得ることができました。

本年度は、旧松城小学校解体跡地の発掘調査を実施したところ、私共の期待どおり、本丸表御殿建物の礎石を発見することができました。今後、本丸地内の全面発掘調査をすることによって、ありし日の本丸表御殿の姿が解明できるものと意を強くしているところでございます。

この事業の継続推進にあたり、文化庁、北海道教育委員会をはじめ関係機関、諸先生方には種々ご配慮をいただきました。今後とも、なお一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和61年3月

松前町教育委員会

教育長 神 正 雄

例 言

1 本書は、国庫補助による記念物保存修理（環境整備）事業に基づく国指定史跡福山城の昭和60年度発掘調査の概要報告である。

2 本年度の発掘調査は、昭和60年9月17日から10月17日までの間、次の体制で実施した。

調査主体者 松前町教育委員会 教育長 神 正雄

発掘担当者 //

久保 泰

調査参加者 斉藤 久、佐々木加代子、佐々木友美、川村久子、福井富子
和田映子

3 本書の編集、執筆、写真撮影は、久保があたった。

4 遺物の実測図、トレースは、主として斉藤久があたった。

5 遺構実測図、トレースは、斉藤久があたった。

6 本年度の調査にあたっては、下記の機関および各氏よりご指導、ご協力をいただいた。

（順不同、敬称略）

文化庁記念物課、北海道教育委員会、北海道立文書館、松前町史編集室

仲野 浩、永田富智、前田正憲、藤田 登、鈴江英一

7 調査によって得られた資料、記録は、松前町教育委員会が保管する。

目 次

I 調査の経緯・調査方法	7
II 調査の結果	12
1 遺構	12
2 遺物	13
III ま と め	23

挿 図 目 次

第1図	史跡位置図／6	第7図	石列配置図／18
第2図	史跡周辺の地形図／8	第8図	トレンチ土層図／19
第3図	発掘位置図／11	第9図	遺物 (1)／20
第4図	遺構配置図／15	第10図	遺物 (2)／21
第5図	1区トレンチ礎石配置図／16	第11図	遺物 (3)／22
第6図	A区トレンチ礎石配置図／17		

写 真 目 次

図版1	調査状況／26	図版4	遺物 (1)／29
図版2	遺構／27	図版5	遺物 (2)／30
図版3	遺構／28	図版6	遺物 (3)／31



第1図 史跡位置図

I. 調査の経緯・調査方法

1. 調査の経緯

史跡福山城は、慶長11(1606)年秋、松前家五世慶広による福山館の築城、以来安政元(1854)年十七世崇広によるわが国最後の旧式法による築城、明治維新、太平洋戦争を経て今日に至っている。史跡地の概要については、「史跡福山城・史跡松前藩主松前家墓所」(松前町教委1984)及び「重要文化財福山城(松前城)本丸御門保存修理工事報告書」(松前町教委1986)に記されているので参照されたい。

史跡地は、文化庁、北海道教育委員会の指導を受け、昭和50年度に「史跡福山城保存管理計画」が策定され、昭和52年度からは国庫補助事業により土地買上げ、家屋移転補償、石垣修理、松城小学校校舎解体調査等が実施されてきたところである。環境整備事業に伴う発掘調査は、昭和55年度以来実施されているが、昭和57年度以前の調査概要及び昭和58・59年度の調査の成果については、夫々報告してきたところである(松前町教委1984.85)。特に昭和58・59年度の調査は、内堀の全容把握と本丸の建物遺構の確認、福山館時代の空堀については、一部内堀に重複しながら、内堀に沿って幅約22m程のものが存在していたことが確認されている。しかし、本丸地内の建物遺構については、後世の擾乱が著しいため何一つとして検出されていない。

本年度は、こうした結果を踏まえ、昭和60年9月17日～10月17日まで、調査面積185㎡、予算94万円(調査概算は町負担)をもって、旧松城小学校校舎跡地を調査した。本年度の調査目的は次の2点にある。

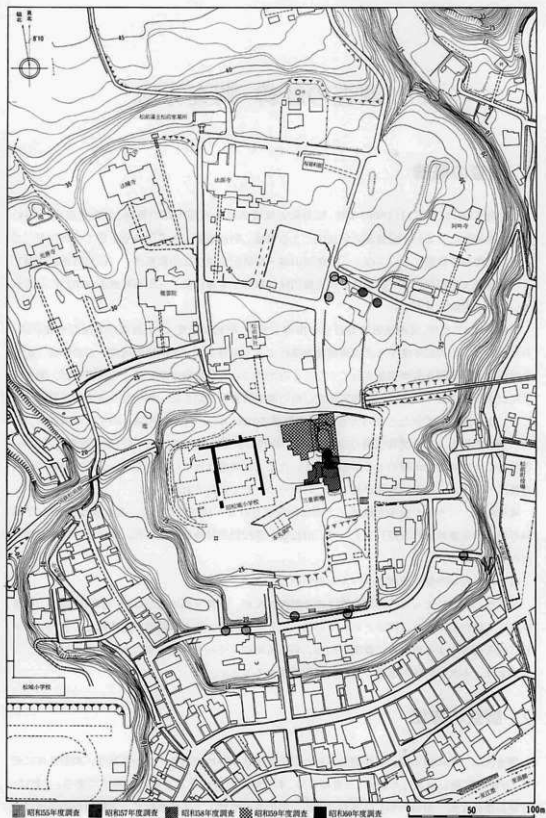
第1は、内堀西側の天端のレベルを確かめること。

前年度の調査によって、内堀基礎はほぼ把握したが、西側天端は明治以降の石垣抜取り、崩落によって確たるレベルは押さえられていない。したがって、本丸御殿礎石を確認し、そのレベル及び縄張り等による建物の位置関係から、石垣天端のレベルを推定することにある。

第2は、本丸御殿跡の遺構の残存状況を確認すること。

2. 調査の方法

調査区は、昭和58年夏、解体調査された旧松城小学校跡地である。この区域は、明治8年に至り、旧城の取壊しがあった時に、三重櫓天守、本丸御門と共にそれを免れた場所である。これは、『開拓使公文書 明治六年』にあるように、福山城の取壊しと主要建物の公廨転用が開拓使に命



第2図 史跡周辺の地形図

じられた際、本丸表御殿建物は、松城小学校として利用されるよう決定されたからである。その後、本丸表御殿建物は明治33年3月まで校舎として使用され、同4月解体され、跡地には解体古材の一部を用いて、同12月新校舎の完成を見ている。こうした経緯があって、少なくとも明治33年に完成した校舎床下部分は、校舎建築時の擾乱のほか、後世の若干の擾乱（例えば水道管の敷設等）しか受けていないとみられる。また、昭和58年度の松城小学校解体調査に際しても、土層の擾乱を考慮し、小学校の建物礎石は現状のまま残置してきた経緯がある。したがって、遺構の保存状況は極めて良好であるとの期待ももてる地域である。^{註2}

調査は、前年度の調査杭（主要な杭は残しておいた）E-2を用い、磁北にしたがい、西へ30mの位置（コンクリート杭埋設）を今年度の基点とし、磁北に合致させた5m×5mのグリッドを設定した。（第3図、4図）礎石の残存状況把握のため、できる限り広範囲にトレンチを設定することとし、当化2m幅、必要に応じて拡張することを予定した。しかし、調査開始と同時に礎石を発見し得たので、結果的に第4図に示した範囲、188.5㎡を調査した。

建物礎石検出、建物建築時面確認、一部礎石下土層確認、実測の後、トレンチ内の小学校礎石の抜き取りを行い、次年度以降の本調査、環境整備に備え、トレンチ内にビニールシート敷設、埋め戻し、填圧を行った。

註1

西村正六位

松浦中判官殿

安田 定則

時任 為基

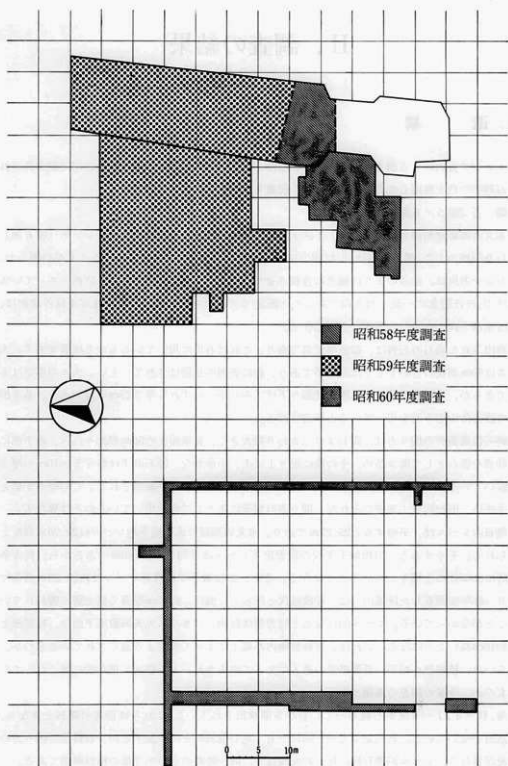
松前城建家図面中朱印符号之分ハ 追々公廨等ニ入用為其召致シ置
其他之分ハ入札拂之上開壁申付可然趣 八月二十二日附三百九号御懸合
差儀承候。

右ハ御見込之通相可成然旨 次官殿談申聞条 此段及御回答候
也。

註2

「明治20年代ころの福山城本丸御殿付近」と伝えられる写真（『史跡福山城保存管理計画書』掲載によると、新築前の松城小学校と天守（三重櫓）が撮られている。松前神社前の塩池付近からの撮影であるが、福山城縄張り図を見る限りでは、本丸表御殿の建物は4棟あった筈であるから、4棟存在していた状態ではこのような写真を撮ることは不可能である。『旧松城小学校解体事業調査報告書』によると「故鎌倉兼助氏（元助役、明治26年松城小学高等4年卒業）の回顧談によれば、松城小学校校舎は、図一Bの下方の2棟であった、という。」と記されている。同文の出自は明らかにされていないが、明治33年以前の松城小学校校舎が、南側の2棟のみ

で、北側の2棟が既に解体されていたとするならば、前記の写真に見える建物の位置関係は納得の得られるものである。明治33年以前に北側の2棟が解体されていたか否かという問題について、これに関しての資料は不明であるが、史料検索を含め今後の課題としておきたい。



第3図 発掘位置図

II. 調査の結果

1. 遺 構

トレンチ方式による調査の結果、当初の期待どおり、本丸表御殿の礎石列及び同時期と目される石列その他を検出した。以下、項目毎に記載していくものとする。

礎 石（第5・6図）

本丸表御殿建物礎石（東石）は、1区トレンチ（第5図）から23個、A区トレンチ（第6図）から9個検出した。礎石の列は、旧松城小学校の建物の方向とほぼ一致していることが判明した。トレンチ方向は、前述のように磁北に合致させてあるが、本丸表御殿建物は1.5°西へズレているだけで、ほぼ磁北に一致した方向であったと断定できる。つまり、南から北へ並ぶ4棟の建物は、ほぼ東西方向であったとすることができる。

検出された礎石の石質は、緑色凝灰岩であり、これは石垣に用いているものと同質である。大きさは50cm前後の方形もしくは長方形であり、特に表面の化粧はされていない。夫々の厚さは不詳であるが、土層観察用に2ヶ所だけ掘り下げてみたが、いずれも厚さ25cm前後であり、基本的には直方体の切り石を用いていると推定される。

礎石設置箇所の掘り方は、礎石より二まわり程大きく、整地面を約50cm掘り込み、最下部に玉砂利を根石として敷き詰め、その後掘り上げ土、小砂利を、礎石直下は砂を5～10cmの厚さに敷いている。更に礎石の間隙は、ロームで固められている状況が観察された。この礎石を掘える手法は、旧松前城小学校のそれが、掘り方の埋土に主として砂を用いているのとは異なる。

礎石のレベルは、平均すると25.27mであり、本丸表御殿の床下面平均レベルは25.20m程度とみられる。そうすると、旧松城小学校の校舎床下レベルは平均して25.40mであるから、校舎新築時に20cm位の土盛をしていることになる。また、旧松城小学校校庭レベルは約25.20m前後であり、昨年度調査した区域内では、安政時代と推定した面は、約10cm程薄く盛土層に覆われていることが分かっている。レベル的に見ると校舎解体跡地、つまり本丸表御殿床下面は、校庭部より約10cm高いことになる。これは、建物敷地内が盛土によって周囲より高くされているものか、あるいは、校庭部が削平、自動車等の進入によって取圧され、土が締って相対的に低くなっているものか、今後の調査の課題となる。

尚、H-8、J-8区から礎石らしい石が3個検出されている。これらは前述の礎石と異なり、自然石を用いている。石の並ぶ方向、間尺とも上述の礎石列とは一致するが、石質及び掘り方の状況が異なり、レベルが礎石列に比べ約20cm低く、同一時期のものか今後の検討課題である。

石 列 (第7図)

B-7区からE-7区にかけて、延長16mに亘ってほぼ一直線に検出されたものである。石は20~40cm大の細長い凝灰岩の割石や川原石を、面を東側に揃えて並べている。石列は、小学校北側校舎と体育館基礎石（緑色凝灰岩）によって切られ、校舎床下に延びている。つまり、校舎新築以前の石列であることは明らかである。レベルでは、石の据えられた面は、本丸表御殿礎石周辺の面よりは若干高い。石列の方向は、磁北に対し東へ4.5°で、本丸表御殿の礎石の列の方向とは一致しない。また、東西いずれかの方向に折れるのかどうか、今回の調査では不明である。

福山館遺構面

G-1区で、安政面（福山城遺構面）にテストビットを入れてみた。土層図は、第5図に示してある。観察の結果、福山館遺構面は安政面より35cm下部にあり、多量の瓦が出土し、その上面はロームを覆せ、整地した様子が窺えた。また、G・H一区、J-7区で地山面まで掘り下げて土層観察を試みた。その結果、G-1区に比べ深く、土層堆積はかなり複雑である。下部からビットらしいものが2ヶ所確認されたが、その性格は分らない。

2. 遺 物

本年度の調査は、少面積、旧松城小学校新築時の盛土層が主体ということもあって、遺物の出土量は少ない。しかも、ほとんどが細片で、図化しうるものは少ない。図示したものは、どうやら器種、器形の窺えるもののうち主なものである。量的には陶磁器類が多く、鉄製品類、瓦が若干ある。瓦は安政期以前のものであることは明らかであるが、他の遺物については、少なくとも明治33年時まで下る可能性のあるものが含まれることは断っておきたい。

陶磁器類 (第9・10図)

1) 磁器碗、湯呑み茶碗 (1~4)、猪口 (5) がある。1は器高が6cmあり、正確な口径は計り難いが飯茶碗かもしれない。外面鴛文、内面の口縁部に雷文が描かれる。2は口縁部が若干端反りし、外面に井桁文、山水文、詩文の一部が見える。釉調は青緑味が強い。4は煎茶碗で、湯呑み茶碗より一回り小型である。外面に詩文と菊花文が見える。5は完形に近い酒器で、赤絵による草花文が描かれる。胎土は、やや灰色味を帯びる。

2) 皿類 (6~10) 染付のもののみで、細片にも色絵のものは見あたらない。6は厚手で、唯一大型の破片で、灰色味の強い胎土を用いている。高台内に描かれるのは、寿の銘であろうか。外面は唐草文のもの (6)、草花文と井桁 (7)、井桁のもの (9) 見込みに山水文 (8)、草木文 (9) がある。

3) 水滴 (11) 箱形で、上面には菊花風の浮文がある。色絵で、上面には赤、水色、黒、青の4色の釉が用いられている。

4) 磁器その他 (12~14) 12は、口唇部を極端に肥厚したもので、煙草盆の「火入れ」に用い

られたものであろう。文様は印版手によるもので、絵柄に重複が見られる。13は胴部が球形に膨らむもので、上半部が欠失しているため、徳利形になるものか瓶になるのかわからない。内面にはロクロ痕が顕著に残る。外面の一部に、呉須が施されている。14は蓋で、合わせ部は施釉されていない。草花に葉を描く。

5) 炆器土甕(15~17) 15、16は小片で、全体形は窺えない。15は呉須で、16は鉄軸、緑釉で絵付けがなされる。16は、松をあしらった絵柄であろう。いずれも極めて薄手である。17は、径からみて、土甕の蓋である。

6) 炆器行平(18) 片口部の破片で、外面は鉄軸、飛鉋がある。口径18cm程度のものであろう。
瓦 (第11図)

安政期の面より下層からの出土である。巴文・唐草文の見える軒平瓦である。にぶい燐銀の光沢がある。今年度のものには記号の付されたものはないが、北陸系の瓦と思われる。機会を見て、胎土分析を試みたいと思う。

金属器類(第10図)

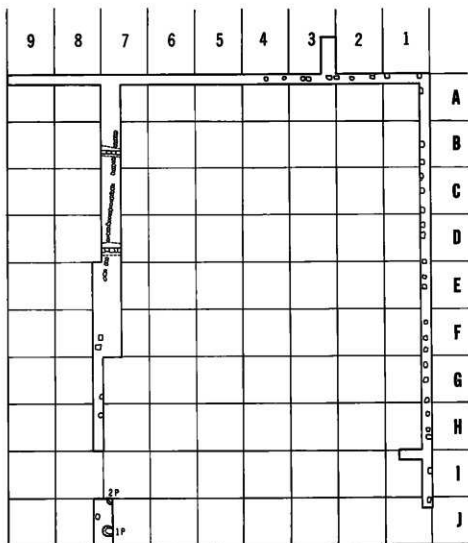
1) 釘類(19~22) 19・20は銅製。19は断面方形、20は六角形である。頭は、鍍により整えられている。21、22は鉄釘。断面は方形である。

2) 鉄(23) 和鉄で、刃部は約6cmである。

3) 乳金具(24) 鍍首、銀甲などとも呼ばれるもので、扉などの釘隠しとして用いられるもの。鉄製で径4.5cm。

4) 簪(かんざし、25) 真鍮製。耳かきの部分が欠失している。

5) 古銭(26、27) 寛永通宝(新寛永)と文久永宝(文久3年鋳)がある。文久永宝は書体から、いわゆる「玉宝」と呼ばれるものである。

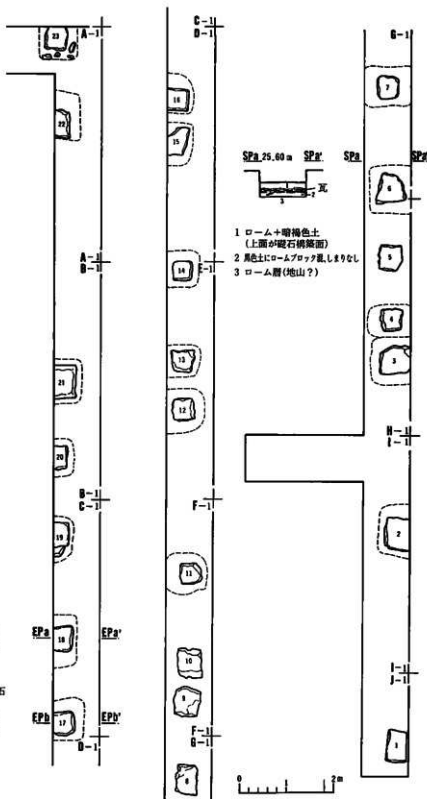
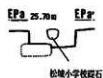


0 5 10m

第 4 図 遺構配置図



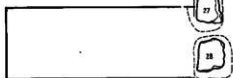
1 - 2	469 cm
2 - 3	364 cm
3 - 4	86 cm
4 - 5	129 cm
5 - 6	147 cm
6 - 7	217 cm
7 - 8	172 cm
8 - 9	185 cm
9 - 10	82 cm
10 - 11	186 cm
11 - 12	347 cm
12 - 13	104 cm
13 - 14	188 cm
14 - 15	273 cm
15 - 16	192 cm
16 - 17	184 cm
17 - 18	179 cm
18 - 19	218 cm
19 - 20	163 cm
20 - 21	171 cm
21 - 22	164 cm
22 - 23	187 cm



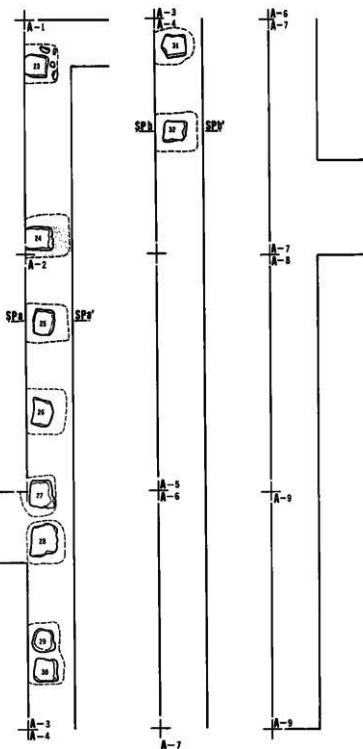
第5図 1区トレンチ礎石配置図



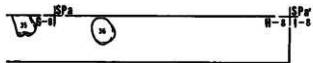
- 1 暗褐色土+ロームブロック
2 良 砂
3 暗褐色土+小砂利+砂
4 玉砂利



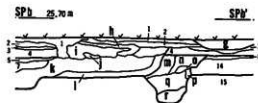
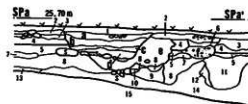
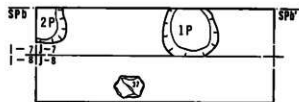
23-24	366 cm
24-25	176 cm
25-26	189 cm
26-27	176 cm
27-28	97 cm
28-29	212 cm
29-30	62 cm
30-31	180 cm
31-32	182 cm



第6図 A区トレンチ礎石配置図

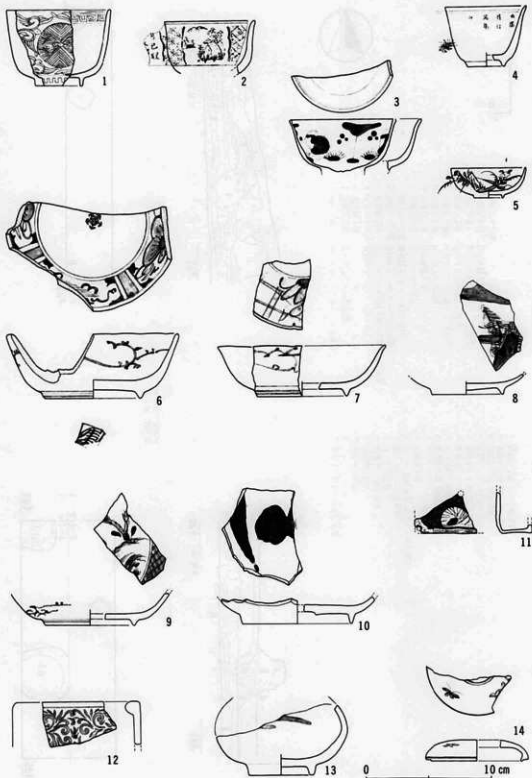


35 - 36 1091 cm
36 - 37 172 cm



- 1 黒色土層 ガラス片・コンクリート片等混入
- 2 黒褐色土層 ロームブロック若干混入
- 3 黒褐色土層
- 4 黄色ローム層 黒褐色土、ブロック状に混入
- 5 黒褐色土層 若干のローム粒含む(上層が安政時代生活面?)
- 6 黄色ローム層 黒褐色土、ブロック状に若干混入
- 7 黄色ローム層 黒褐色土、ブロック状に混入
- 8 暗褐色土層 若干のローム粒含む
- 9 黒褐色土層 自然堆積土?
- 10 暗褐色土層 ロームブロック混入
- 11 黒褐色土層 ロームブロック混入、しまりなし
- 12 暗褐色土層 ロームブロック若干混入
- 13 黒色土層 若干のローム粒含む、しまりなし
- 14 暗褐色土層 自然堆積土と思われる
- 15 地山ローム層

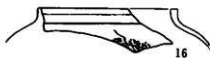
- a 褐色土+砂利+中間自然層
- b 褐色土+砂利
- c 褐色土+砂利
- d 青色腐敗粘土
- e 黒褐色土 砂を含む
- f dとほぼ同様
- g 攪乱、ガラス片等含む
- h ローム 黒褐色土、ブロック状に混入
- i 黒褐色土層
- j ロームブロック
- k 暗褐色土層 砂利を多量に含む
- l 灰白色粘土質層 砂利を含む
- m 暗褐色土+ローム粒
- n 暗褐色土+ロームブロック
- o 黒色土+ローム粒
- p 暗褐色土層 混入物無し
- q 黒褐色土層 ローム粒含む
- r 黒褐色土層 ローム粒含む



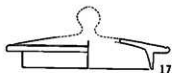
第9圖 遺物 (1)



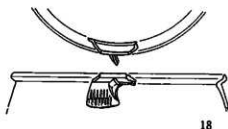
15



16



17



18

0 10 cm



19



20



21



22



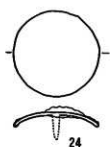
23



24



25



26



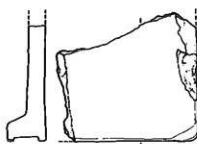
27



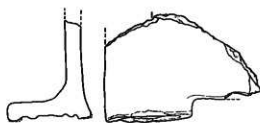
28

0 5 cm

第10圖 遺物 (2)



28



30



29



31



0 10 cm

第11圖 遺 物 (3)

Ⅲ．ま と め

今年度の調査の成果、次年度以降の調査課題を記して若干のまとめとしておきたい。既に述べたように、今年度の調査目的は2つあった。これらを中心にして述べていきたい。

本丸表御殿建物跡については、期待通り32ヶ所の礎石（東石）を検出することができた。これらはその配置、レベル等からみて、確実に安政元年の築城期に存在した建物の礎石と判断してよい。棟の方向は磁北にはほぼ一致し、東西に長い建物とみることができる。しかし、今年度の調査からは、どの棟のどの位置の礎石であると断定するには至らない。トレンチ調査の限界である。推測が許されるならば、東西に長く4棟あったうち、南側から3棟目までの建物の礎石の一部としておきたい。調査結果からみて、明治33年の松城小学校新築時には、校舎敷地部分にある礎石はそのままにして、15～25cm盛土して整地していると思われる。昭和18年の国鉄松前線敷設工事によって破壊された北側棟部分を除き、残る3棟の建物跡の礎石はかなり残存しているとみられる。本丸表御殿礎石レベルと校庭部のそれとの比較では、校庭部に礎石に残る可能性は極めて低い。旧松城小学校の礎石のほとんどが緑色凝灰岩であり、校庭部にあった不用（妨げ）になった礎石は、校舎の礎石に転用された可能性が高い。しかし、今回確認した礎石の掘り方の観察結果を踏まえ、抜き取り真を観察することによって、高い確率で3棟の建物跡は把握できであろう。

内堀西側の天端の問題については、極手となる成果はない。しかし、今年度と前年度の調査結果から、校庭部は、現地表面から約10cm低いレベルが安政期の生活面と推定した。昭和59年度概報で述べたように、内堀西側天端レベルは、最終的には内堀北側部分の調査結果を待って結論を出さねばなるまい。しかしながら、当面その調査が難しいわけであるから、別の観点から推定しなければならない。そこで、現在までの発掘調査の成果と、市立函館図書館と松前神社に残る縄張り図によって見ていくことにしたい。これらは、夫々、『史跡福山城保存管理計画書』、『史跡福山城Ⅱ』に付図として添付されている。この2枚の縄張り図は、主要建物、構造物ともほとんど同様に表現され、現地形と照合して、信憑性はかなり高いと思われる。松前神社所蔵の縄張り図には、部分的ながら間数が記入されている。（内堀については、橋受台部より西側は23間、東側は20.5間、北側の幅は6間4尺と記載されている。絵図に表示された長さ、発掘調査の結果から、東側は22.5間の誤りかと思われる。）また、絵図に表われる内堀の形状、三重櫓、本丸御門との位置関係から推定して、内堀周辺の建物の配置関係等もかなり信頼がおけるとみられる。と、するならば、内堀の天端に関しては、次のことが言えそうである。

- 1）東側橋受台は、残存石垣からみて、ほぼ現在のレベルと思われる。
- 2）東側橋受台角より北へ8m付近から、天端は石垣にして2段程度高いかもしれない。これは、搦手門の北側にあった御番所南西角から内堀へ向けて19間2尺の間は石積の表現がされ、それ

から北側部は1段高く平坦に表現されているからである。

- 3) 内御役所建物東側の石垣天端は、24.90mであると考えられる。前年度調査の結果では、内御役所建物の床レベルは、現校庭レベルよりは低くなく、縄張り図の表現で見る限り、本丸表御殿と同レベルとみられる。2枚の縄張り図によって推定される内堀西側と内御役所建物との間隔は1～2m弱の幅である。内堀天端が低くなればなるほど、内堀西側と建物の間の空間の法面は広くなるわけで、法面の幅が広くなればなるほど、上述のように間隔が限定されているのであるから、建物の維持そのものが困難になってくる。石垣の天端は、建物の床下レベルにできる限り近いものでなければならぬ。そこで比較の対象となるのが、旧状に近いとみられる西側石垣南端部のレベルである。ここのレベルは24.895mであり、本丸地内の安政期の生活面レベルは25.10mと推定しているから、その差は約30cmである。内堀の東側橋受台から西側を見た時、左右同レベルの石垣天端の場合の方が安定感が得られよう。内御役所建物東側付近の内堀天端が24.90mであっても、法幅を考慮したとしても、建物の維持は難しくない。したがって、このレベルをもって内堀西側の天端と考えておきたい。

尚、橋受台レベルとの関係では、橋受台北東コーナーのレベルを基点とし、北西レベルは24.90mまで急角度でせり上っていきと見られる。これは、同南側でも同様と思われる。

福山館時代の面の確認調査は3ヶ所で試みたが、確たる成果は得られていない。本丸表御殿は何度かの増改築が考えられており、次年度以降の調査では、こうした観点に立った調査が必要である。

さて、本丸表御殿の建築年代には言及しなかったが、これは、現在までの調査研究でも明らかにされていない。北海道立文書館所蔵の開拓使文書『官倉倉庫其他官倉絵図表明治九年十二月西館支庁』の中に「渡嶋国津軽郡福山旧城内本丸建物」の図がある。添付されている調書によれば、「旧城内本丸、渡嶋国津軽郡福山第八大区福山新荒町、地坪5468坪4分、建坪1233坪7分5厘、創立年月不詳追々出張所移転ノ見込ニ付存ヲキ…」と記されている。また、安政元年に完成した福山城の各建物等の内訳を記した『御城縄張り調』によっても、本丸表御殿についての記載は一切見られない。この築城時に本丸御殿も新築されたのであれば、同書に何らかの記載があってもよいし、明治9年まで僅か20年余しか経っておらず、「創立年月不詳」とするのも疑問である。安政期の本丸御殿の姿が、いつの時点で整ったのか解明する必要性が生じてくる。

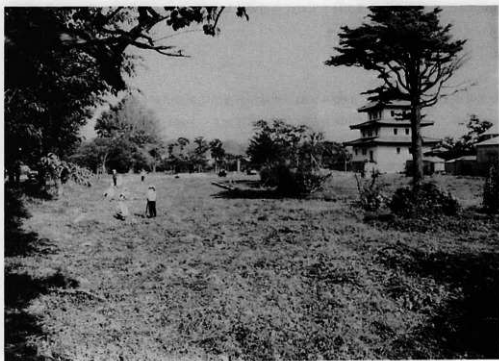
現在、本丸表御殿の平面図を示すものは前記のほか、『松前城之図』（梅木通徳氏寄贈、松前城資料館、年代不詳）、『松前御役所御礼座諸絵図』（道立文書館蔵、文政三庚辰六月）、『松前自沖口至奉行所図』（国立公文書館内閣文庫蔵、文化4年以降）のほか、『松前屏風』（田付欣三氏蔵、松前町教委蔵）がある。これらに表現された本丸表御殿の建物配置は各々異なっており、時代を追って増改築されていった可能性を示している。これら諸絵図類の比較検討、文献に記された事項、本丸表御殿跡地の全面発掘調査の結果と併せ、建物の建築年代を吟味しなければならぬ。次年度以降の調査では、慶長5年に落成した福山館本丸表御殿が、寛永14（1637）年

の災焼の後、どのような変遷を経て安政元年の姿になっていったかを解明していきたいと思う。

参 考 文 献

- 北海道埋蔵文化財センター 1982～1984『史跡松前藩戸切地陣屋跡』 上磯町教育委員会
前田 正憲 1985 『史跡松前藩戸切地陣屋跡』 上磯町教育委員会
長沼 孝 編 1982 『史跡・白老仙台藩陣屋跡』 白老町教育委員会
松崎水穂 他 1980～ 『史跡上之国勝山館跡』Ⅰ～Ⅳ 上ノ国町教育委員会
松前町教育委員会 1984 『史跡福山城・史跡松前藩主松前家墓所』
松前町教育委員会 1984 『旧松城小学校解体事業調査報告書』
松前町教育委員会 1985 『史跡福山城 Ⅱ』
前 久夫 1980 『古建築のみかた図典』 東京美術
前川久太郎 1978 『道具からみた江戸の生活』 ベリかん社

図版 1 調査状況



調査開始時の状況（西側より）



調査状況（西側より）

A区トレンチ礎石
(東側より)



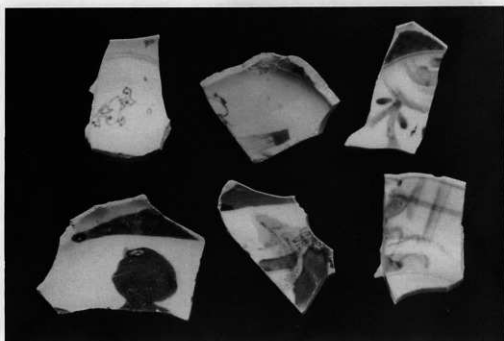
礎石下部の状況

1区トレンチ礎石
(北側より)



石列 (南側より)

图版4 遗物 (1)



圖版6 遺物 (3)



史跡 福山城Ⅲ

発 行 1986年3月29日

発行者 松前町教育委員会

印 刷 北海道機関紙印刷所

史跡福山城Ⅲ
昭和 60 年度 発掘調査概要報告
電子版

2025 年 2 月 20 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060 / FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城Ⅲ 昭和 60 年度 発掘調査概要報告
(1986 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。